ケルンの画廊
Gemäldegalerien in Köln

柴田　隆行
Takayuki Shibata

1. ヘーゲルのケルン訪問

ヘーゲルは、1822 年 9 月、絵画鑑賞のためドイツ西部からベルギー、オランダを旅した際にケルンに寄っている。1827 年 10 月にパリを訪ねた際にも帰路ケルンを再訪した。ケルンでヘーゲルは何を見たかを知るために、まずはヘーゲルが妻に送った書簡を見ることにしよう。

1822 年 9 月 28 日付（書簡番号 436）

> ヒルン婦人 (Hirn) の指示で私もリュヴァースベルク (Jakob Johann Lyversberg, 1761-1834) のコレクションを見ました。すばらしい作品群です。一つはたぶんレオナルドです。――それから彼女の勧めでヴァルラフ教授 (Ferdinand Franz Wallraf, 1748-1824) のところへ行きました。――とても思慮深く愛すべき 75 歳の男性です！――彼の持っている絵は――すばらしい。〈瀕死のマリア〉は、ボアスレのものより小さいですが、それを彼は私に夜もう一度見せてくれました。30 分かそれ以上もです。II:353

この書簡について書簡集編者ホフマイスターは次のような註を加えている。

> ヤーコブ・ヨハン・リュヴァースベルクは、ヒルン婦人の従兄弟で、ボアスレやヴァルラフよりも前に絵画収集を始めた。このコレクションは 250 点を擁する。1837 年にこのコレクションは競売に出されるところだったが、リュヴァースベルクの 4 人の娘、ケルンのハーン家とバウマイスター家、ウンケルのフォン・ガイアー家、フランクフルトのヘルスター家に分割され、のちにふたたびまとめられてハーンの所有となった。そして最後にもちろんかなり数量を減らしてフィルニッヒ・コレクションという名で知られるようになった。――レオナルドのどの絵を指すかを判定するのは難しい。これを解明したのは、ド・ノエルとフランツ・フーベルト・ミュラーが編集した『リュヴァースベルク・絵画コレクションのカタログ』（ケルン、1837 年）であった。

リュヴァースベルク・コレクションのカタログ (*Catalog der Lyversberg'schen Gemälde-Sammlung in Cöln*. Köln 1837) に、ダ・ヴィンチ作として〈モナ・リサ〉が載っている。これはまず間違いなく複製品であろう。ヴァルラフ・コレクションにある〈瀕死のマリア〉についてホフマイスターは次のように註記する。

> くだんの〈マリアの死〉は、ヘーゲルの時代にはヤン・ファン・スコーレル (Jan van Scorel, 1495-1562) に帰せられていた。この絵はその後長い間〈マリアの死〉の大家の名で通っていたが、のちにオランダ人ヨース・ファン・クレーフェ (Joos van Cleve, c.1485-1540/41) の作品と認められた。複製された額縁に 1515 という年号が見られる。この絵は、ケルンのノイマルクトにあるハッケナイ家の騎士館の自邸礼拝室に由来するらしい（ハッケナイ家の人々は寄進者として描きこまれている）。フォン・シュロースベルク夫人の所有だったものをボアスレ兄弟が購入し、彼らから、似たような対象のもっと大きな絵と交換してヴァルラフの手に渡り、ヴァルラフの所有からケルンのヴァルラフ・リヒャルツ博物館のもとに来て、今日もなおそこにある。

〔略〕ここで考えられているのはもっと大きな三枚祭壇画〈マリアの死〉である。これはボアスレ兄弟がヴァルラフと交換したものである。これはかつてケルンのカピトルの聖母マリア教会の祭壇の、1523 年にハッケナイ家によって寄贈された朗読台の下部にあった。ボアスレ・コレクションとともに、この絵はミュンヒェンのピナコテークに来ている。〔略〕以上は、ケルンのヴァルラフ・リヒャルツ博物館館長の親切な助言に依る。

ヘーゲルの書簡の続き。1822 年 10 月 3 日付（書簡番号 437）

日曜の朝、私はヴァルラフの絵画を明るい所に出してもらいました。その中のメインは〈マリアの死〉であり、これを描いたのは疑いなくスコーレルです。ボアスレのものである同じ対象の絵——君もとても気に入っている絵です——も彼の手によるものです。ヴァルラフのものはもっと小さく、約 2 フィート半ですが、幅は広いです。一翼にある受贈者と他の翼にある女性はまったく同一の肖像です。それらは私が古くからよく知っているものでした。〔略〕けれど、絵の人物の配置やベッドの位置などは違っています。

1827 年 10 月 12 日付でエルバーフェルトから妻宛の書簡（書簡番号 566）

水曜日の午後ケルンに着きました。〔略〕今日の午前を私たちは、崇高な大聖堂やヴァルラフ・コレクションを再訪し〈瀕死のマリア〉などを見たり、牡蠣を食べたりワインを飲んだりなどして有意義に過ごしました。

ケルンに関して、ヘーゲルにはもう 1 件、ガラス・コレクションについて触れた書簡がある。1823 年 8 月 23 日付ヴィンディッシュマン (Karl Josef Hieronymus Windischmann, 1775-1839) 宛（書簡番号 459）。

高額の資金がこのコレクションにあてられるであろうことはほぼありうることです。それは、芸術部門に最近どれだけ多く割り振られ、関係する諸施設にどれだけ多くの支出がなされたかを考慮すればわかります。あるいはヒルン夫人が売却する機会をほかに持っているなら、予期せず思い切って行動を起こすかもしれません。イギリス人も、ゴシック趣味ゆえにたいてい色彩ガラスを用いるので、安価に自らの需要を満たす工場を持っています。そうなったら、私がいまこのことについて語りうること、その援助のために私が心から協力するであろうことはもはや多くないでしょう。

これだけでは何の話か理解しづらいが、書簡編者ホフマイスターの註により具体的な状況が読みとれる。

ガラス窓の有名なコレクションは、1824 年、劣悪な事務処理の結果競売に出さねばならなかった。フリードリヒ・シュレーゲルはプロイセン王のためにその鑑定を行った。ド・ノエル (Matthais Joseph de Noel, 1782-1849) は、ゲーテが手本としたカタログを著した。メルロ (Johann Jakob Merlo, 1810-1890) はしかし、このカタログに載っていないハンリヒ・シーファーが実際の所有者だったと明言している。フェルスター『ケルンの芸術コレクション』（ベルリン、1931 年）200 頁の註によれば、シーファーはヒルン夫人の最初の結婚の息子で、彼女のワイン商の共同経営者である。フェルスターは上掲書 98 頁で、ノエルはおそらく競売に際してコレクションの大部分を取得したと報告している。こんにちケルンの博物館所有であるガラス絵の多くがノエルの寄贈物とされ、前掲カタログではヒルン・シーファー・コレクションと名づけられている。

2. ケルンの絵画収集

数百年かけて大聖堂を建設するほど商人が活躍した町ケルンには、17 世紀以降少なからぬ芸術作品収集家がいた (Vgl. Otto H. Förster, *Kölner Kunstsammler vom Mittelalter bis zum Ende des bürgerlichen Zeitalters. Ein Beitrag zu den Grundfragen der neueren Kunstgeschichte, Berlin* 1931.)。財政的に恵まれただけではなく、フランス革命後の教会世俗化傾向と、当地のフランス軍占領により教会が閉鎖されたり（1802 年 6 月 9 日に 42

の教会が閉鎖)、教会財産が没収されたりするなかでの、宗教画や祭壇その他の装飾品を芸術作品として保護する必要があったことによる。

ここでは、ヘーゲルとイエナ時代から親交を結びハイデルベルクでそのコレクションを鑑賞したボアスレ兄弟は別稿に譲り、先に紹介したヘーゲルの書簡で鑑賞報告されていたリュヴァースベルクとヴァルラフについてのみ取り上げる。

(1) リュヴァースベルク・コレクション

リュヴァースベルクは、タバコ商として成功し、ボアスレ兄弟等よりも早くから名画を収集していた。フリードリヒ・シュレーゲルは1805年刊の自ら編集する雑誌 *Europa. Eine Zeitschrift*. Zweiten Bandes zweites Heft, Frankfurt a.M., 1805 に「古い絵画についての第三補遺 (Dritter Nachtrag alter Gemälde)」を掲載、そこでルーブルと並んでブリュッセル、デュッセルドルフ、ケルンで見た絵画について詳しく報告している。ケルンのリュヴァースベルク・コレクションについてシュレーゲルはこう記す。

> リュヴァースベルク氏のもとでのかの組曲の対象は、die Einsetzung des Abendmahls, die Gefangennehmung Christi am Oelberge, die Verspottung nebst der Geisselung im Hintergrunde; die Darstellung vor Poutius Pilatus, der Hingang zum Kreuz, die Kreuzigung, die Abnahme von Kreuz und die Auferstehung である。これらの絵画は金地に描かれているが、その多くには極めて瑞々しい緑の風景が金地に添えられている、一般的には色鮮やかに極めて明るく輝いた緑が特に主調をなしている。これらの絵画は最も美しい古美術品に属する。(S.138)

「かの組曲」とは、校訂版全集の脚註によると「救世主の受難史の小さな絵」とあり、のちにヴァルラフ・リヒァルツ美術館に収蔵されたいわゆるパッション連作を指すと思われる。同じく脚註に「古美術品」に「古ドイツ芸術の」という限定が付けられている (Friedrich Schlegel, Ansichten und Ideen von der christilichen Kunst, in: *Kritische Friedrich Schlegel-Ausgabe*, Bd.4., Paderborn 1959, S.144.)。

ゲーテも1815年にケルンを再訪した際、ボアスレ兄弟のほかヴァルラフ、リュヴァースベルク、フォヒェムなどの絵画コレクションを見ている (Johann Wolfgang Goethe, Campagne in Frankreich Belagerung von Mainz Reiseschriften, in: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 1.Abt. Band 16. Frankfurt a.M. 1994, S.256.)。

前掲参考文献の著者フェルスターによると、リュヴァースベルクの屋敷のうち 2 部屋に絵画が展示されており、地上階には古ドイツ派の絵画が、二階には近代絵画が展示されていたという(a.a.O., .91)。シュレーゲルやゲーテ、ショーペンハウアー、そしてヘーゲル等が鑑賞したこのコレクションは、しかし、1834年のリュヴァースベルク氏の死去後、所有者が定まらず、1837年8月16日に競売に付された。絵画は148点出品された(後掲リスト参照)。スコーレル、カラッチ、カラヴァッジョ、ルーベンス、ファン・エイク、ファン・ダイクなどのほか、ヘーゲルが見たというレオナルド・ダ・ヴィンチの〈モナ・リサ〉などが含まれる。

なお、1971年5月26日にもリュヴァースベルク・コレクションのオークションが開かれており、絵画は88点が出品されている。著名な画家の作品としては、ファン・ダイクの Die Verspottung Christi(売約済み)、テニールスの Das Bauernhaus と Landschaft mit Bauernhaus(ともに4000 DM)があり、レオナルド・ダ・ヴィンチの〈モナ・リサ〉は Kopie と記され、値段が付いていない。

なお、ヘーゲルは個別には言及していないが、リュヴァースベルク・コレクションで現代に至るまで最も高い評価を得ている作品は、カタログ冒頭に掲げられている 8 点の〈キリスト受難図 Passion〉である。これはすべてヴァルラフ・リヒャアルツ美術館が購入し、現在も館内で常設展示されている。

1837 年のオークション・カタログ(Catalog der Lyversberg'schen Gemälde-Sammlung in Cöln, deren öffentliche Versteigerung an den Meistbieteden am 16. August 1837. Cöln)を参考資料として添付の DVD に収めるが、ここでは、ヘーゲルが講義か書簡で言及している画家のみ抜き出しておく。

カラヴァッジョ	75. Frau mit einem welschen Hahn.
	148. Anbetung der Hirten, ohne Rahmen.
カラッチ	66. Maria mit dem Kinde.
	68. Christus am Oelberg.
スコーレル	24. Grablegung.
デューラーか	22. Verspottung Christi.
テニールス	71. Ein Bauer.
デンナー	84. Kopf einer alten Frau.
ファン・ダイク	49. Verspottung Christi.
	69. Christus im Schoosse der Maria, Kreuzabnahme.
	86. Vier Mohrenkopfe, Studien.
	74. Der heil. Franciscus in Verzückung.
ファン・エイク	16. Erzengel Michael.
レオナルド	62. Bildniss der Mona Lisa, Gemahlin von Franz del Giocondo.

(2) ヴァルラフ・コレクション

ヴァルラフ(Ferdinand Franz Wallraf, 1748-1824)は、植物学、数学、神学、美学等々と多才な分野を研究する教授職を務めると同時に著名な芸術作品収集家として知られる。1816 年始めの段階で、イタリア絵画 254 点、オランダ絵画 177 点、古ドイツ絵画 240 点、ケルン派絵画 147 点、肖像画 184 点の収蔵品があった (Das Museum Wallraf-Richartz in Köln, seine Begründung, Ausdehnung und der Neubau. Fest-Beilage der Kölnischen Zeitung vom 1. Juli 1861, dem Eröffnungstage des Museums.)。ヴァルラフは 1824 年 3 月 18 日に没するが、その時点では収集品は Hof 1 番地(現在のヴァルラフ広場)の彼の居住地にあった。収蔵品は、絵画 1616 点、うちイタリア絵画 376 点、オランダ絵画 304 点、フランス絵画 8 点、古ドイツ絵画 309 点、ケルン派絵画 358 点、肖像画 261 点あり、その他、銅版画 19000 点、木彫や装飾品等 41000 点、コイン等 4086 点、鉱物標本等 9923 点、図書等出版物 18500 点以上を数えた(ibid.)。1827 年 7 月にこれらの収蔵品は、大聖堂のす

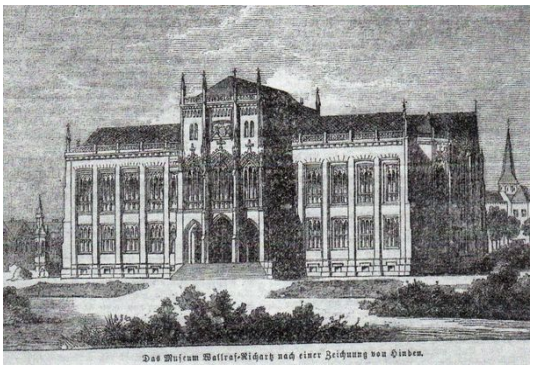
Das Museum Wallraf-Richartz nach einer Zeichnung von Hinden.

Fig. 219. Kölnischer Hof, Trankgasse 7, abgebrochen.

ぐ近くにある Trankgasse7 番地（Drankgasse という表記も見られる。Trank は「飲料」だが、Drank「汚水」）の旧司教館 Kölner Hof(Kölnischer Hof とも呼ばれる）に移され、市立博物館となった。1828 年刊行の『ケルンとボン』と題する都市案内書 (*Koln und Bonn mit ihren Umgebunge. Für Fremde und Einheimische*. Aus den besten, und vorzüglich aus noch unbenutzten, Quellen bearbeitet. Köln am Rhein 1828.) が 10 ページ近くを割いて（とくに 81, 131-139)、この博物館を詳しく紹介している。これによると、絵画で最も注目に値する作品は Luc. von Leyden の聖母マリア像で、これは後述するヴァルラフ・リヒァルツ博物館が毎年発行している図録の表紙や宣伝ポスターにもしばしば使われている。後で詳しく紹介するスコーレル作とされた〈マリアの死〉も特筆されている。ヘーゲルは 2 度ケルンを訪ね、その都度ヴァルラフ・コレクションを鑑賞しているが、1 度目の 1822 年はヴァルラフ生前のことであり、氏の自宅での展示であった。2 度目は 1827 年であり、この時は市立博物館へ移管された後であり、したがって、ケルナー・ホーフで鑑賞したはずである。

1832 年 3 月 19 日、市はケルンの画家であり絵画収集家でもある小説家ノエル (Matthias Joseph de Noel, 1782-1849) を市立ヴァルラフ博物館の管理人に任命した。その後、ケルンの商人リヒャルツ (Johann Heinrich Richartz, 1795-1861)が建築費用を負担し、現在のヴァルラフ広場前に、ヴァルラフ・リヒァルツ博物館を新設、1861 年 7 月 1 日に開館した（これは空襲で破壊され、現存の建物はその後に建てられたもの）。

1862 年刊のカタログが、いまのところ入手しうる最も古いカタログであり、ケルン市芸術・博物館図書館(Kunst- und Museumsbibliothek)の蔵書でもこれが現時点での最も古いカタログである。これには、1824 年のヴァルラフ死後に入手された絵画も載っているので、ヘーゲルが 1822 年と 1827 年に見たヴァルラフ・コレクションの内実は、これでは正確にはわからない。上述のように、ヴァルラフ生前の 1816 年と没年の 1824 年とで収集品の数が大きく異なる。この点を考慮して、ヘーゲルが鑑賞し得た絵画作品を推定しなければならない。インターネットで入手しうるカタログは 1869 年版以降のものであり (*Verzeichnis der Gemälde-Sammlung des Museums　Wallraf-Richartz in Köln*. Aufgestellt und mit kunstgeschichtlichen Erläuterungen versehen von J. Niessen, Conservator. Köln 1869.)、これと 1862 年のカタログでは、作品数はさして異ならないが、配列も作品名も異なるため、どれがどれに対照するかを判定するのは容易ではない。試しに照合してみたが、明らかに同一作品を指していると思える作品はあまり多くない。バイエルンやカッセルのような作品統一番号が整備されることを願う。

資料として、美術館開館時に公刊された 1862 年のカタログ (*Katalog des Museums Wallraf-Richartz in Köln. Verzeichniss der Gemälde-Sammlung. Verzeichniss der römischen Altarthümer*. Köln 1862) を DVD に添付する。ここでは 1862 年のカタログからヘーゲルが言及している画家のみ作品名を書き出しておこう。なお、このカタログでも 1870 年代のカタログでもヘーゲルが長時間鑑賞した〈瀕死のマリア〉が見あたらない。1903 年版では Joos van Cleef の作として、1910 年版ではスペルが異なるが (Josse van Cleve)、Tod Maria として載っている (No.442)。

オスターデ	623. Zwei Bauern mit einem Weibsbilde in einer Schenke beim Trinken.
ステーン	626. Bauernprügelei.
テニールス	617. Trinkende Bauern in einer Schenke.
デューラー	380. Pfeifer und Trommler.
	381. Madonna mit dem Kinde.
	382. Madonna mit dem Kinde.
	383. Vier Apostel.
	384. Gefangennehmung Christi.

ファン・ダイク	558. Bildniss der kölner Patriciers Eberhard Jabach.
	559. Bildniss desselben Jabach.
	560. Die Grablegung.
	561. Die Grablegung.
ルーベンス	555. Des h. Franciscus Stigmatisation.
	556. Erzherzog Albrecht.
	557. Anbetung der h. drei Könige.

Wallraf-Richartz-Musesum Köln- Vollständiges Verzeichnis der Gemäldesammlung. Köln 1986 は、副題にある通り、当美術館が所蔵する絵画コレクションの出版時点での完全リストが掲載されており、絵画の入手時期や出所等もすべて記録されている。これにより、1830 年以降に所蔵された絵画をすべて削除し、出所が Sammlung Ferdinand Franz Wallraf と明記されているものだけを抽出したリストを作成した（DVD 収録ファイル参照）。

現在公開されている Wallraf-Richartz-Museum のホームページ (http://www.wallraf.museum/sammlungen) に、いま展示されている作品の画像が Mittelalter, Barock, 19.Jahrhundert, Graphik の 4 つに分けられ、Rundgang のページで展示室ごとに紹介されている。そこにも各作品の取得ないし借り受け年が記されているが、これを見ると現在展示されている作品の多くが 20 世紀以降のものであることがわかる。Mittelalter では Franz Wallraf の収集品が半数を越えるが、Barock では 2 割に満たない。

最後に、ヘーゲルがヴァルラフ教授の好意により作品を明るい所に出してもらい、30 分以上も鑑賞し、1827 年にケルンを再訪した際にもまた見たという〈瀕死のマリア〉または〈マリアの死〉について言及しておきたい。この題材の作品は 2 点あり、ヘーゲル書簡に書かれているように、1 つはボアスレ・コレクションにある（1827 年の整理番号第 132）。ヴァルラフは聖マリア教会にあった 1520 年作の大きい絵を買い取り、ボアスレはハッケナイ家の家庭祭壇にあった 1515 年作の小さい絵を買い取ったが、彼らはなぜかこれを 1810 年に交換している。したがって、現在ケルンのヴァルラフ・リヒァルツ美術館で見られるのはヘーゲルと同様に小さいほうであり、大きいほうは現在ミュンヒェンのアルテ・ピナコテークに所蔵されている。「君も気に入っている」とヘーゲルが書いているように、ハイデルベルク時代ヘーゲルは夫人を連れてボアスレ家をしばしば訪ねており、その際にこの作品も見たと思われる。その際にボアスレから、同題の作品がケルンのヴァルラフ教授のもとにあることを聞かされていたにちがいない。ヘーゲルがケルンを訪問した目的の一つに、この作品の鑑賞があったのではないか。なお、この作品は、ヘーゲルが見た当時はスコーレル (Johann Schoreel, 1495-1562) の作と考えられていたが、現在はいずれもクレーフェ(Joos van Cleve, c.1485-1540/41)の作として鑑定されている。

参考までに、ボアスレ・コレクションの作品も添付しておこう。